

幼児における柔道指導法の日独比較

-遊戯的観点に着目して-

腹巻 康子 (201311974、体操コーチング論)

指導教員：長谷川 聖修、本谷 聡

キーワード：遊戯的運動、柔道プログラム、柔道人口の減少

【目的】

日本における柔道人口の減少は深刻であり、およそ20年で9万人も柔道人口が減少している。この日本人の「柔道離れ」に対して、子どもを対象とした指導法の見直しが必要であると考えた。

そこで本研究では、ドイツ柔道連盟（以下、DJB）と全日本柔道連盟（以下、全柔連）の幼児における柔道の指導内容を比較し、遊戯的な観点に着目して幼児を対象とした柔道指導のあり方について基礎的な知見を得ることを目的とした。

【方法】

1. ドイツの実態について、DJBによる5歳から7歳の子どものための指導法（Programm des DJB für Kinder）に関する資料における指導法や取り組みを調査した。DJB ホームページ

(<http://www.judobund.de/jugend/jugendaktionen/judo-spielend-lernen/>) より資料を入手した。

2. 日本の実態について、全柔連による公認柔道資格C指導員用のテキストから、子ども向けの指導の取り組みや指導内容を調査した。

3. 「指導理念」、「柔道指導におけるアイテム」、「柔道プログラム」の3つの観点から日独を比較した。

【結果と考察】

1) 指導理念：DJBには、「柔道価値10条」として「友愛」、「礼儀」、「謙虚」、「尊敬」、「助け合いの精神」、「尊重」、「克己」、「誠実」、「忠実」、「勇気」が提唱されている。一方、全柔連の子ども向けに作られたポスターには「柔道MIND」として「あいさつ」、「やさしく」、「きまり」、「いっしょうけんめい」、「なかよく」、「たのしく」という言葉が掲げられている。両者を比較すると、全柔連の「柔道MIND」には「たのしく」という言葉が含まれているが、DJBの理念にはこれに該当する言葉がない。ドイツでは元来スポーツは遊戯性を有しており、日本では武道としての柔道という文化的な認識の違いがあることから、敢えて「たのしく」という理念を提唱したと考える。

2) 柔道指導におけるアイテム：両国とも様々なものが製作されていた。具体的には、ドイツでは「柔道

パスポート」や「柔道シール」、「達成バッジ」というアイテムがあり、幼児の指導場面において活用され、子どもたちの意欲向上につなげている。これに対して日本では、「少年少女柔道手帳」というカレンダーや日本代表選手のプロフィールなどが書かれたアイテムが作られていた。しかしながら、これは平成23年度版で絶版となっている。

3) 柔道プログラム：DJBでは幼児対象の具体的なプログラムが示されていたが、全柔連では示されていなかった。加えてDJBが提示するテキストの内容には、非常に遊戯的な運動が多く組み入れられており、体操を連想させるような一人でする運動（図1）からペアやグループになってする運動までであった。

以上のことから、DJBの取り組みとして、柔道にこだわらず他の運動領域の内容も組み込まれており、幼児が喜ぶように工夫されていた。日本における「柔道離れ」への対策として、多くの日本人に柔道の魅力を感じてもらうためにも、DJBの普及戦略について目を向けてみる価値があると考えられる。

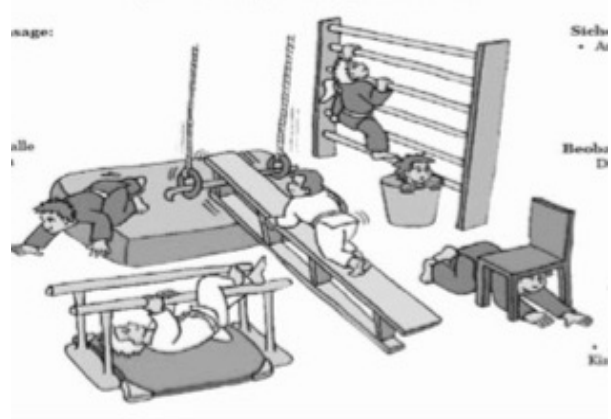


図1 DJBの幼児における遊戯的プログラム例（虫の国）

【結論】

DJBでは幼児に対しての様々な取り組みに長い歴史があることが明らかになった。一方、全柔連においては、ジュニア期ということまでひとまとまりとしての指導法は展開されていたが、特に「幼児」を対象にした実践的な指導内容は確認できなかった。今後、日本においても遊戯的な観点を有した幼児における柔道プログラムの構築について考えていきたい。